

## 狩野元信印「富士参詣曼荼羅」について

成城大学 高橋 真作

---

狩野元信印「富士参詣曼荼羅」(富士山本宮浅間大社蔵)は、東海道から富士山頂に到る広大な富士信仰圏の景観を収め、宮曼荼羅から参詣曼荼羅への移行を示す過渡的作品として、また元信工房による現存唯一の参詣曼荼羅の遺例として注目されるものである。本発表は、従来漠然と捉えられてきた本図の制作者と発注者について論及し、その制作背景について試論を述べるものである。

画家については「元信工房の有力画人」とする説が大勢を占めるが、本図に見出される元信個人様式的特質(斜線構図、雲・建物・人物像の表現等)から、狩野元信(1476/7-1559)の直接的関与の可能性を指摘し、本図を元信関与による現存唯一の大画面細画大和絵作例として位置付ける。さらに、別筆と目される追加訂正の人物像と「高雄観楓図屏風」(東京国立博物館蔵)等におけるそれとの相似性から、元信の次男・狩野秀頼(生没年不詳)の参加を確認する。これによって、本図の制作時期は、上限を秀頼の東寺大絵師職辞任後(狩野家復帰後)＝天文14年(1545)頃、下限を元信の没年＝永禄2年(1559)に求められることになる。

この時期に本図を注文した人物としては、駿河の戦国大名・今川義元(1519-1560)を置いてほかにはないと思われる。画面の描き直しからは、画家よりも富士に詳しい注文主像が想定されるが、画面形式や描写範囲等を勘案するならば、義元はその注文主としてもっとも相応しいだろう。義元を補佐した今川氏軍師・太原崇孚雪斎(1496-1555)は妙心寺で大休宗休(1468-1549)に師事し、生涯に亘っての深い交流を確認できるが、元信もまた大休と深い関係を築いている。すなわち、義元-雪斎-大休-元信という紐帯の可能性が見出されるのである。さらに秀頼も雪斎の法系に連なる関東の妙心寺派僧と交流があり、本図をめぐる人的ネットワークの想定を補強する。

本図は義元の母・寿桂尼(1526-1568)に捧げられたものとも推測されている一方、あるいは義元による駿東地域支配政策に連動するものであったとも考えられる。義元は当時の富士登山道の宗教勢力(村山修験・大宮社人)を掌握し、その聖域の整備と維持に努めていた。義元がこの時期に村山や大宮に対する統制を強化したことの背景には、富士川以東地域の領有権をめぐる北条氏との軍事的衝突が影響しており、天文14年(1545)の第二次河東一乱以降、義元は徐々にこの地域への支配強化を押し進めていた。本図は、そうした政治状況の中で制作されたものであり、富士の威光のもとに富士全域の統治に臨む、在地支配のイデオロギーを支える視覚装置として機能したものとも考えられる。